様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：２２７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ０２１０７

研究課題名（和文）個人化社会における〈自己メディアとしての写真〉の文化社会学的研究

研究課題名（英文）A Cultural Sociological Study of Photography as a medium for the maintenance of the self in the Individualized Society

研究代表者
角田　隆一（Tsunoda, Ryuichi）

横浜市立大学・国際教養学部（教養学系）・准教授

研究者番号：８０６３１９７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：パーソナルな写真文化は今日、なぜこれほど支持を獲得し続けているのか。本研究では、この写真文化を「自己メディア」として積極的に捉え直し、イメージ表象の分析と理論研究から、その社会的機能の内実を明らかにした。現代社会において、写真は「自己メディア」としてその社会的機能の中身を変化させつつある。すなわち写真は、言語に構築される自己を支えるメディアというよりはむしろ美的な感覚や感情によって構成されるようなメディアとして積極的に用いられ、その美的再帰性の具体的中身も社会状況に応じて変化させている。この変化についてのより深く掘り下げた分析やその理論的意味についての考察は、近く論文等の形でさらに明確化する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、パーソナルなヴァナキュラー写真文化論という学術的な写真研究における新領域の本格的な展開であり、また、近現代社会論／自己論における新しい研究題材の展開を達成するという、学術的に独自性の高い着眼と方法論に基づく斬新的な研究となる。それとともに、ますます盛り上がりを見せている今日の写真文化への高い社会的関心に対しても、学術的研究として真摯な応答をおこなう試みともなる。

研究成果の概要（英文）：Why does personal photographic culture continue to thrive so much today? In this study, we actively rethink this photographic culture as a medium for the maintenance of the self and use image analysis and theoretical research to clarify its social function. In contemporary society, photography, as a medium for the self, is changing the content of its social function. As a result, photography is actively used as a medium that supports the self as constituted by aesthetic sensations and emotions (aesthetic reflexivity) rather than as a medium that supports the self as constructed by language/narrative (cognitive reflexivity), and the specific content of its aesthetic reflexivity is changing in response to social conditions.

研究分野：社会学

キーワード：写真コミュニケーション　個人化社会　自己　再帰性　文化社会学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「自己メディア」（自己の維持のためのメディア）としての写真文化は、今日の社会で大変な盛り上がりを見せている。この写真文化は、日本ではとりわけ 1990 年代から注目され始めたが、20 年以上経た現在においても、その勢いは弱まることなく存在感を高め続けている。この文化に対する強い支持はどのような意味をもつのか。流行り廃りの激しい現代社会において、これほどまで長期に渡って支持を獲得し続けてきた、その文化の社会学的意味について問われてしかるべきである。

実際、この文化の意味についても社会的に高い関心を集めており、この文化を“解釈”した記事や社会批評レベルの言説は膨大に量産され続けているが、それは、乏しい論拠のもとで、現代の若者のナルシスティックな自意識や承認欲求の肥大化を指摘するといった、書き手の思い込みの域を出ない表層的な考察に終始しているのが現状である。

とはいえ、学術的研究レベルでの応答もまた充分ではない。既存の学術的写真研究は、主に美学・芸術学の領域でなされてきた芸術写真論と、社会科学的なメディア・コミュニケーション論の領域でなされてきた「マス・メディアとしての写真」論（戦争写真論や報道写真論など）であり、これまで「パーソナル・メディアとしての写真」文化の研究自体が十分に行われてこなかったのである。しかしながら、この「パーソナル・メディアとしての写真」研究に対する軽視というのは、偶然でも研究者の怠慢によるものでもなく、ある社会的文脈に基づくものである。

まず見えやすい文脈では、①現代社会におけるメディア・コミュニケーション環境の変化である。この変化に応じて、メディア・コミュニケーション論の領域では近年、携帯電話／スマートフォンや SNS などを具体的事例としたパーソナル・コミュニケーション論の研究蓄積が急速に進んでいる。よって写真研究もまた、この動向に応じて、パーソナル・コミュニケーションに照準を合わせた新領域の切り拓きが積極的に進められる必要がある。

この動向はまた、②本格的な個人化社会の到来という文脈とも密接な相関関係にある。A. Giddens（『モダニティと自己アイデンティティ』）、U. Beck（『危険社会』）、Z. Bauman（『リキッド・モダニティ』）らの近現代社会論をふまえれば、個人化社会とは、「私」（自己）を構築し維持することが個々人にとって切実な“課題”となる社会のことである。この問題的状況に写真文化が密接に関与している。だからこそ、個人化の問題が本格化する時期と「自己メディアとしての写真」文化が高まりを見せ始めた時期が重なる。それは、写真文化の個人化を意味するのではなく、個人化社会が本格化して「自己の維持」が切実な課題となったとき、これにどうにか対処する個々人の営みの中に写真というメディアが積極的に動員されている（それにより写真文化が強く支持を受け続けている）ということを意味しているのである。よって、個人化社会が本格化した、この現代社会の構造や性格について理解を深めていくためにも「自己メディアとしての写真」文化研究が積極的に進められるべきである。

本研究課題では、この写真文化を、本格的な個人化社会の到来という社会的文脈のもと、「自己メディア」という枠組を用いて学術的研究対象として積極的に捉え直し、その現代社会論的意味を探究する。

２．研究の目的

本研究は、既存の研究では十分に対象化されてこなかった、複数領域の交差地点に位置するこの研究対象を、〈自己メディアとしての写真〉という枠組のもとで学術的な研究の対象として中心に据え、その社会的機能を明らかにする。

そのために本研究では、ドキュメントの分析など質的な調査方法も用いて、〈自己メディアとしての写真〉文化に関わる歴史的ならびに現代的データを収集、分析し、その写真実践の変化と社会の変化の連動的な変化を「データ対話」的に考察する。

これらによって、本研究は、学術的な写真研究における新領域の本格的な展開、ならびに、近現代社会論／自己論における新しい研究題材の展開を達成するという、学術的に独自性の高い着眼と方法論に基づく斬新的な研究となる。それとともに、今日の様々な写真文化への高い社会的関心に対して、学術的研究としての真摯な応答をおこなう試みともなるだろう。

３．研究の方法

〈自己メディアとしての写真〉の社会的機能を、「人間関係構築」機能（写真実践によって人間関係を維持・構築する機能）と「現実構築」機能（写真実践によって現実を認識・構築する機能）という二領域に大きく区分したうえで、とりわけ本研究では「現実構築」機能の検討に焦点を当てた。「現実構築」機能ついては、さらに［セルフイメージ］（自撮りなど自らの外見認識の様相）と［世界イメージ］（自らの世界認識の様相）という二つの観点（分析対象）に分けて取り上げ考察した。それぞれ、研究代表者（角田隆一）が［世界イメージ］パート、研究分担者（木村絵里子）が［セルフイメージ］パートを主に担当する。

まずは、（1）〈自己メディアとしての写真〉の「現実構築」機能の社会学的文脈に関する共同検討作業（角田隆一・木村絵里子・ゲスト研究者）をおこなう。
社会的関心の高まりに応じて昨今関連出版物や研究が増加しているが、各々の研究が有意義に連関していないため、まずは、近年刊行された出版物の検討会をこの研究領域に通じている研究者とともにおこないながらこれらの整理作業をおこない、また同時に、これらの整理作業に基づき、触発を受けながら、さまざまなドキュメント分析も助走的な作業として試みて、仮説の発見を見出せるようつとめる。
次に、上記Ｉの仮説的発見を意識しながら、（2）イメージ表象（雑誌・作品）の分析（角田隆一・木村絵里子）をおこなう。〈自己メディアとしての写真〉文化に関わるイメージ表象（雑誌・作品）の歴史的ならびに現代的データを収集、分析し、各イメージ表象の特徴や性格の分析、歴史的な変化についても分析を進める。その写真実践の変化と社会の変化の連動的な変化を「データ対話」的に考察する。
最後に、これらに基づいて、（3）現代写真文化による［セルフイメージ］／［世界イメージ］を捕捉するための理論的枠組の検討作業（角田隆一）をおこなう。とりわけ、現代的「自己」の内実を正確に捕捉するための理論的枠組の再検討、ならびにこれと関連づけられた、現代的「写真コミュニケーション」を捕捉するモデルを明確化するための理論的枠組の再検討をおこなう必要がある。

４．研究成果

（1）〈自己メディアとしての写真〉の「現実構築」機能の社会学的文脈に関する共同検討作業
（角田隆一・木村絵里子・ゲスト研究者）
まず、荒井悠介氏（一橋大学［当時］）を交えての本研究課題の内容確認（2019 年 4 月）をおこなったあと、以下のように、月に 1，2 度のペースで研究会を開催して、〈自己メディアとしての写真〉文化の「現実構築」領域における先行研究の批判的検討ならびにドキュメント・データ分析の研究発表と研究作業を積み重ねた。
荒井氏による 2000 年代以降における特徴的な外見表象の若者文化についての研究報告（同年 5 月）、久保友香『「盛り」の誕生』（太田出版）の文献検討会と角田隆一によるインスタグラム文化にみる再帰的自己論の研究報告（同年 6 月）、木村絵里子による［セルフイメージ］パートの雑誌分析の成果報告（二回）と角田隆一による［世界イメージ］パートの雑誌分析作業（同年 7 月）、三浦展・天笠邦一『露出する女子、覗き見る女子』（ちくま新書）、天野彬『SNS 変遷史』（イースト新書）、米澤泉『筋肉女子』（秀和システム）それぞれの文献検討会（同年 10 月）、高橋幸氏（日本女子大学）によるミスキャンパス論の研究報告からジェンダー論的観点からの「見る－見られる」関係について批判的に検討し、さらには木村絵里子による［セルフイメージ］パートのイメージ表象分析の成果報告（歴史社会学的考察）をおこなった（同年 12 月）。

（2）イメージ表象（雑誌・作品）の分析（角田隆一・木村絵里子）
上記研究成果Ｉから、今日の「自己メディア」の社会的機能の現代社会論的意味を探ることにおいて、「美的な再帰的プロジェクトとしての写真文化」という枠組のもとでイメージ表象を検討することの重要性を確認し、［セルフイメージ］パート、［世界イメージ］パートそれぞれにおいて中心的に分析するべき具体的なイメージ表象（雑誌や作品）を見極め、各自分析作業を進めた。
①【［セルフイメージ］パート】（木村絵里子）
日本社会において写真が普及し始めたときから、例えば「美人写真」と呼ばれるジャンルが成立していたように写真と女性の結びつきは強く（木村 2019a，2020a）、近年のソーシャルメディアなどでの［セルフイメージ］の生成・共有も、女性的な文化として位置付けることができる。別途、JSPS 科研費 JP19H00606 の助成を受けて 2020 年に行った計量調査データによると、とりわけ視覚イメージを重視したプラットフォームである Instagram の利用者は、やはり圧倒的に女性が多いことがわかった。これらのことは、女性に〈美しさ〉を求めるジェンダー化された身体規範が深く関わっている。しかし、こうした規範に着目するだけでは、〈自己メディアとしての写真〉の実践のすべてを明らかにすることはできない。
そこで、『小悪魔 ageha』や『non-no』など複数の女性誌（木村 2021b，2021c）の分析を行い、まずはソーシャルメディア以前の実践について検討することとした。とりわけ注目すべきが 90 年代半ばに数多く創刊された『egg』や『東京ストリートニュース』などのストリート系ファッション誌である。ファッションページにおける読者モデルの起用や読者のストリートスナップが特徴的であるが、それだけでなく読者モデルたちにインタビューを行い、通っている高校、放課後は誰とどこで何をして遊んでいるのかを示す 1 週間のスケジュール、生い立ちなどが取り上げられ、さらに日常的に撮られた写真やプリクラが披露されるという類いの記事があった。つまり、ここでは目に見える形で「ライフスタイル」が提示されているのである（「ヴィジュアル・ライフスタイル」）。こうした記事を通して読者モデルたちのプリクラや思い出の写真は、コミュニティ以外にも拡散された。
また、誌面の読者モデルたちのヴィジュアルイメージは、その後、ヘアメイクなどを駆使してより派手に華やかになり、これらが「盛り」と呼ばれるヴィジュアル・コミュニケーションにつ

ながっていく。例えば『小悪魔 ageha』では、「盛り」は、もともとヘアメイクや「デカ目」メイクによってよりかわいい状態になることを指す、美容関連の言葉であったが、「盛り」のための「自撮り」がヘアメイクと機能的に等価なものとして位置づけられるようになる。「自撮り」による写真うつりでは、「実物より鏡よりかわいくなる」ことが目指されるのであり（2010 年３月号：28-29)、自撮り（の格闘）とは、いわば、ヘアメイクとともに「盛り」、すなわち自分自身で、セルフイメージをコントロールするための手段の一つとなった。

その意味では、写真のイメージを加工できるアプリも、自撮りによるセルフイメージのコントロールの延長上にある。加えて、Instagram や Twitter などのソーシャルメディアは、誰もがセルフイメージや自らのライフスタイルを披露することのできる舞台となっていると考えられる。

②【[世界イメージ] パート】(角田隆一)

現代写真文化の［世界イメージ］の中身を探るうえで、『GENIC』という雑誌に着目して検討した。現代日本社会における写真文化の流行りの動向に敏感に応えながら比較的長く定期刊行を続けている雑誌であるため、この変化をある程度捕捉することができると判断した。

もともとファッション／趣味としての写真文化(“カメラ女子”)を対象に据えた『女子カメラ』という誌名で 2006 年に創刊した本誌は、2015 年あたりから大きく一変して「インスタ映え」に照準を合わせた内容にシフト（2017 年に「インスタ映え」が流行語）する。“(フォト）ジェニック”に雑誌名を変えた方針に端的に表われている通り（コンセプト「カメラとトラベルのライフスタイルマガジン」)、コントラスト鮮やかな極彩色のトーンが前景化し、写真の撮り方から旅行やライフスタイルの提案に至るまで「映える」ための指南が全面に押し出されるようになった。

その雑誌が 2020 年初頭からまた性格を変化させてきている。「My Identity with Camera（写真を通して伝えたいこと)」とコンセプトが打ち出され、「The Power of Photography 表現者が撮る世界」(54 号,2020.3.6)、「TOKYO and ME 表現者が撮る東京」(55 号,2020.6.5)、「表現者の旅スタイル」(57 号,2020.12.7）といった特集が立て続けに組まれている。この最新の変化の特徴としてはまず、「インスタ映え」の極彩色のトーンから一転して、ソフトでふわっとしたトーンのいわゆる「エモ」いイメージの強調が指摘できる。「エモ」とはエモーショナルの略で、当人の“感じる”感覚（激しく揺れ動くのではなく、微弱だが当人にとっては愛しい感触として“感情や気持ちが動く”こと）を重視することを指す。そして、もう一つの特徴としては、「表現」が誌面の中で頻出するキーワードとなったことである。誌面に写真を提供するフォトグラファーたちは、すでにプロとして名の知れている者も一部いるが、多くは Instagram や Twitter などの SNS である程度のフォロワー数を獲得しているインフルエンサー的なポジションの者たちである。ここで求められているのは、表現のオリジナリティの追求では決してなく（先行作品に酷似する表現手法を採用する写真が多数存在する)、高度な技術を必要とせず誰にも真似（フォロー！）することができるようなやり方で、しかし、ふわっとした“感じる”感覚の雰囲気「表現」の繊細さが丁寧に追求されていることこそが、そこでは一貫して提案されている。

2010 年代半ば以降のこれら特徴と変化が、SNS 時代の写真表現であり、その［世界イメージ］の現在地点である。歴史的にみると、この「エモ」系の写真表現は、1990 年代に流行した「日常スナップ写真」イメージ表象（雑誌『egg』や『アウフォト』）と比較すると、かなり共通の性格を備えているが、とはいえ 90 年代のこの雑誌はかつて角田隆一が「自己物語論」(後述「認知的再帰的自己」）という理論的枠組を適用して考察しており（「思い出をつくる若者たち」)、やはり両者は美的観点から興味深く異なっている。「語る」自己から「盛る」／「映える」自己、そしてゆるく「感じる」自己へ。これらの 20 年強のあいだの［世界イメージ］の美的内実の差異＝歴史的変化については現在、更なる丁寧な分析作業が目下進行中である。

（３）現代写真文化による［セルフ／世界イメージ］を捕捉するための理論的枠組の検討作業

（角田隆一）

上記研究成果の分析から示唆的に再検討に迫られるのは、まず、現代的「自己」を捕捉するための理論的枠組である。「再帰的自己」論を援用すると、写真文化と結びついた 90 年代後半以降の「自己」像は、言語＝物語的な「認知的再帰」的な自己（A.Giddens）から「美的再帰」的な自己（S.Lash）へとどんどんその性格が強まりを見せ、さらには美的再帰性が SNS と組み合わさってさらに本格的に駆動された 2010 年代以降は、その具体的様態の展開がはっきりと姿を現したようにみえる（「盛る」→「映える」→「エモ」)。美的な再帰的プロジェクトとしての写真文化の現在地点である「エモ」イメージという“感じる”感覚の雰囲気「表現」は、再帰的な対自関係(“自分で自分を”)のかなり進行した、閉塞的ともいえる様態を示す顕現の一つであろう。

しかしながら、そのますます切り詰められ、すり減らされる“自分自身による”美的再帰性は、それゆえに、逆説的に強く外部にその準拠点や養分を求めることになる（“共感”)。そのコミュニケーションのプラットフォームがまさに SNS であり、これに対応した写真コミュニケーションのモデルがアップデートされる必要があるだろう。スマートフォンによって常時の「世界コミュニケーション」(N.Boltz）状況の中で「美的な再帰的プロジェクト」として実践され続ける今日の SNS 写真コミュニケーション文化は、「フォト・“グラフ”」というよりは、「フォト・“プロジェクト”」的な写真＝イメージ観を備えた V.Flusser による写真＝テクノ画像論の枠組で捉え直すとともに、彼の企図に沿って、その現況の批判的な問題性とその可能性の両方をあくまで当該文化の「中」から丁寧に見極めつつ考察を深めていく必要があるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 木村絵里子	４．巻 49(10)
２．論文標題 1980年代、『non-no』の恋愛文化――現在を対象化するために	５．発行年 2021年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 91-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木村絵里子	４．巻 38
２．論文標題 書評：田中亜以子著『男たち／女たちの恋愛――近代日本の「自己」とジェンダー』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 総人・人環フォーラム	６．最初と最後の頁 29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木村絵里子	４．巻 94
２．論文標題 メディア経験としての「東京百美人」――19世紀末の新聞記事からみるメディア・イベントの成立過程	５．発行年 2019年
３．雑誌名 マス・コミュニケーション研究	６．最初と最後の頁 205-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木村絵里子	４．巻 -
２．論文標題 北海道・京都の若者における若者の恋愛と婚活、結婚	５．発行年 2021年
３．雑誌名 北海道・京都府 20-30代 暮らしの実態と価値観に関する調査報告書	６．最初と最後の頁 108-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Eriko KIMURA and Ichiyo HABUCHI
２．発表標題 Romantic Behavior of Young People Living in Rural Japan：Network and Trans-Locality
３．学会等名 IV ISA Forum of Sociology, International Sociological Association（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 木村絵里子
２．発表標題 ミス・コンテストの社会学（２）――女性向けメディアと男性向けメディアにおける「ミスコン」の語られ方の比較分析
３．学会等名 国際ジェンダー学会大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 木村絵里子
２．発表標題 恋愛の価値は、もうなくなったのか？――歴史的視点から
３．学会等名 第92回日本社会学会大会シンポジウム（３）「恋愛」
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 木村絵里子・轡田竜蔵・牧野智和	４．発行年 2021年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 194
３．書名 場所から問う若者文化――ポストアーバン化時代の若者論	

１．著者名 木村絵里子	４．発行年 2020年
２．出版社 白澤社	５．総ページ数 155
３．書名 「〈外見〉の発見と日本近代――「美人」の写真を「見る」ことの社会的様式に着目して」時安邦治編『日本近代再考（学習院女子大学グローバルスタディーズ④）』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

角田隆一「映像文化にみる「再帰的自己」の現代社会論的考察」『公益財団法人横浜学術教育振興財団 平成30年度助成研究等報告書』2019年

角田隆一「V.フルッサー写真論に基づいた現代日本写真文化のメディア社会論的読解」『公益財団法人横浜学術教育振興財団 令和3年度助成研究等報告書』2022年

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	木村　絵里子 (Kimura Eriko) (60710407)	日本女子大学・人間社会学部・助教 (32670)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関